

## 発達に違いのある子どもたち

# 「違う」とともに生きる といひう」と

シリーズ

作家、東田直樹さんの小説「自閉症の僕が飛び跳ねる理由」は、現在30カ国以上で翻訳され117万部を超える世界的ベストセラーとなり、作品は今年映画化され、4月2日に角川映画より公開されました。この作品は直樹さんが13歳の時(2005年)に出版したもので、自閉症である彼が感じるさまざまな世界を情緒豊かな表現で綴り、これまで理解されていなかった特異な行動の理由を知ることのできる作品として注目を浴びました。2013年、イギリスの作家、デイヴィッド・ミッチェル氏(自閉症のお子さんを持つ父)により翻訳され、「The Reason I J ump」が刊行。国境を超えて世界中の自閉症の子どもや大人、家族を救うことになりました。

東田直樹さんは自閉症者であり、28歳である現在でも、滑らかに話しことばで表現できるわけではありません。一つのことばを発するためには、パソコンのキーボードの配列で書かれたアルファベットの版を、ローマ字打ちで一字ずつ指で押さえながら声にして伝えています。文字を媒介手段として自分の考えを表現できるようになつたのは、お母様がさまざまな人との関わりの中で得た情報をもとに、幼少時に始

めた「筆談」の成果ではあります。が、彼がその手段を用いて表現できるようになるまでには、親子で血の滲むような努力を重ねられたことは言うまでもありません(「勇気はおいしいはず/2005年小学館より出版」参照)。

### 見た目ではわからない

話しかけても目を合わせることもなく、大きな声を出したり飛び跳ねたり、見た目にはコミュニケーションが困難と思える子ども達が、本当に見ていないのか、聞いていないのか、それは外見からは判断できないことです。私達の事業所にも、幼児期のころはことばでの表現が難しく、奇声を発したりパニックになつたりしていたお子さんが、成長とともに表現する力が向上してきた途端、突然幼少時に起きたさまざまなことを鮮明に語り出し、保護者やスタッフを驚かせるという場面も最近はいくつかありました。そのお子さんの以前の様子を知る人には、想像できなかつたことと思います。

自閉症スペクトラム障害(以下ASD)の人の脳機能のように、他者の表

情を理解したり自分の気持ちを表情

に表したり、感覚情報の受け取り方の違いにより外界で起きることの解釈が違つてしたり、見え方や聞こえ方が違つてたりすると、さまざまな場面でいわゆる「普通」の人と違うことばを発したり、行動を取つたりすることがあります。それは世の中では「困った人」として捉えられるのでしょうか、あくまで多数派である「普通の脳」の人による見た目の解釈でしかありません。

### 彼らの視点に立つこと

世の中の大多数である「普通の脳」の人に合わせて作られた現代社会で適応して生活するために多くの「ASD」の人は自分なりの解釈を通して「普通の脳」の世界を想像し、違和感を感じつつもその中で生きていくための努力をしています。

しかし、生まれつき脳機能に違いがあると、一生を通して「普通の脳」の人と同じ感覚体験をすることがないため、「普通にして」とか「普通のやり方で」となどと言われても、求められる行動を100%理解し実行することはできません。

そこには、両者の違いを理解し、つなぐことができる「人」や「物」の存在が必要であり、それが得られない状況においては、いわゆる人的、環境的な「障がい」となってしまうのではないでしょうか。



勇気はおいしいはず  
東田直樹著 / 小学館



自閉症の僕が飛び跳ねる理由  
東田直樹著 / エスコアール,  
角川文庫, 角川つばさ文庫

### 異なる世界をつなぐもの

東田直樹さんのように、文字言語

を用いて表現をする術を持っていたり、

「ASDの脳」の感じ方を適切に代弁してくれる「普通の脳」の人の存在が

身近にある場合は、それらが異なる世

界をつなぐ「橋」となり、互いの世界の

理解を深めていくことができます。

しかし、常にその環境の中にいるときは限らないために、予期せぬ出来事が起こつた時、想像もつかぬ不都合な事態となることも稀ではありません。次

回は、そのような状況を回避したり、遭遇してしまった時の対応など、いくつかご紹介できればと思います。

### 参考文献